

翻刻『癸丑詠草 丙辰詠艸』

大阪府立中央図書館 佐藤 敏江

はじめに

底本は大阪府立中之島図書館蔵（甲和一三二七）、加納諸平自筆 一冊（三五・五×二五・五cm）表紙表裏各一、本文三二丁（内白紙一丁）

本書は江戸時代の歌人、国学者として知られる加納諸平の自筆本。書名に「癸丑詠草 丙辰詠艸」とある様に、嘉永六年（癸丑）と安政三年（丙辰）の詠草を記したもので、この内八十五首、一題、四詞がきが、「柿園詠草拾遺」（明治十八年刊行）に収載されている。

加納諸平（文化三〜安政四）、通称は小太郎、兵部、杏仙、号は柿園。夏目甕磨の長男、文政六年藩医加納伊竹の養子となる。句読を中山美石に、国学を本居大平に学ぶ。安政三年紀州藩国学所総裁となり、石川依平、近藤芳樹と共に「二平一樹」と称せられた。柿園派を率い、門下には伴林光平、飯田年平、海上胤平等がいる。著作物には、「類題鯨玉集」（編集）、「秋風集」「柿園集」「別本柿園集」「柿園詠草」「諸平翁詠草」等の歌集の他、「柿園考説」、「柿の落葉」等がある。

凡例

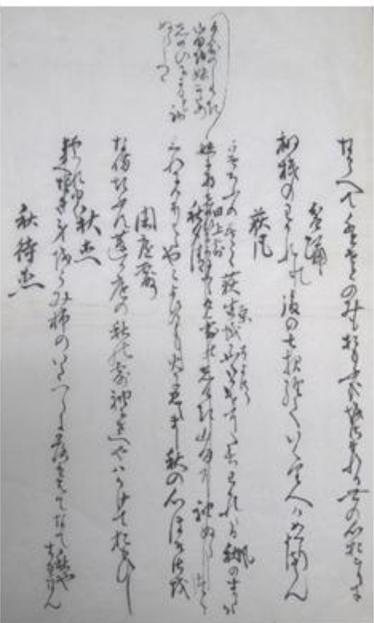
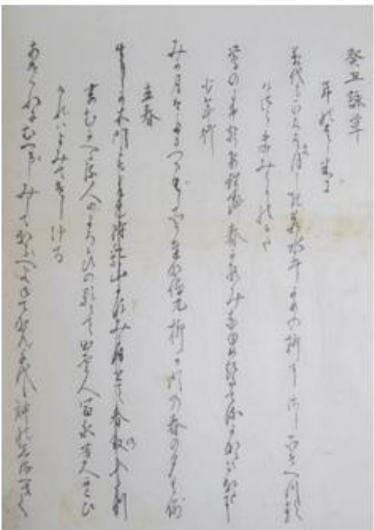
底本に忠実を旨とし旧漢字はそのまま表示した。

異体字は通行の字体に改めた

判読出来ない文字は□で、確定できない文字については（カ）を付して表示した

訂正の部分は取り消し線を引き、加筆部分は青字で表示した

柿園詠草拾遺に収載されている和歌は★印を付して表示した



癸丑詠草

年のはじめに

萬代もむすはまはほしき若水午かめの柳にさしそそへつる

けさとふみうりのかた

鶯のよふ聲すなり春かすみなまめきたてるかなたこなたに

少年行

みか月はたかつまくしそなたなびく柳か門の春の夕くれ

立春

の

生もしか木門上そよけれ待乳山かすみにはひて春そ入たや

妻むかへたる人のよるこひの歌とて 出雲人富永芳久かこひければ よみて遣しける

あけくれにむつまじみしてなからへよさてなん千代も神のしるへく

世をのかれ給ひて注①★にしの濱殿におはしましける

大殿の君かくれさせ給ひぬれば門さしてこもり侍りつつ

かしこけれど、こし方の事とおもひ出られてかなしひ侍りける中に、今は十とせの

をちつかた西山主ことりて、國の名所などを、さとひたる事ともとりましへて書

つへく仰こと有ける。郷(カ)に那智のたきのかたはいかさまにかうつすらむ。はやう

みつから繪かけるもあるを、しかくなど御もと人に仰せられけることゝもいひつた

ふせ

へられければ、おもほし給ふらんまゝにといそしみ侍りけるを、しばし病にまもれる

ほど、いかなるよしにか有けん。その書つくることとたえて、かの翁も去年みまから

れしかば、さしもおもほしけん御心もいたずらになり侍らんことゝかへすく世のあ

ちきなきことをなけき侍りて

★年月もいと雲井にへたゝれるたきのひゝきよいつかきかまし

初子のまつ引てよへる

の

引残す野邊のこまつは妹とわか中のねのひに手すさひにせん

旅宿

し傳て

注②★太刀の緒を、しかの角にとりしたて、より寝やせまし萩原のさと

★濱木綿屋にて例の円位上人の影前會すとて歌すゝめける まうけ題 餘寒

かすみても見えましもをみよし野のあらしの奥に雪そうもれる
下もえむわか菜つみにとさそひてもかた瀬に野邊のふゝきをそおもふ
野を寒み若菜摘み袖にたに立もとまりぬ春かすみかな

梅かゝもとすれは消てものおもふ閨のひまもるはるのあらしに
聞もるゝ梅かゝ寒みつま琴の春のしらへそかへり聲なる

★袖すくもちのかへしに梅かゝもおのか垣ねのやつれをやとふ

膝かくるみとりのいともとたへして柳につらき夕かせそふく
人けなまわか山科の袖くらめまりとてはるそかせなあらしそ
またしらぬあらしもうたて春されは霞になびく人のこゝちを

花遠き嵐の窗の篠すたれさらになや春をへたてはつらん

さえかへるはるの夜床のひとり寝に花まつはかり久しきはなし

春寒み空ゆくたづの朝影も雲にみたれてあわ雪そ降

(欄外 板本鷹も) 注③★ゆくともみしきのふの鷹の立かへりおつる田面に沫ゆきそふる

啼てたつかりの涙やこほるらんはるの日かけもうす雪のそら

うくひすのたよりの竹のかきほともしらで音なふ春のあらしか

今さらに吹なすよりそ春のかせ花なき里となれもこそあれ

花をとふ心もしらで鹿杖の瓢にふるゝ山おろしかな

みよし野の山した風にさとかへり雪もふりにし跡をこそとへ

二月十五日の夕つかた、一門にそゝのかされて、河北なる梅下の齋殿にものして二日

三日こもりあてよめるうたの中に

月はまた春ともしらず火たき屋のけふりをはらふ梅のあらしに
たきさしてむかふ外山の松の葉にまた影さむき月そかゝれる
有明の月影寒き手枕にわかれし鴈のこころ乎そ思ふ

★あけゆきは枕わかるゝ浪のおとにうみへの宿そ朝いせらるゝ
明ぬとてきゝすはなけと礧山のまつにねふれる浪の音かな

内口口ゆきゝすの聲におもひ寝の夢路の花はのこしやりけり

御室つく山彦ならしやひゝてのおとにこたふる朝鳥のこゑ

この歌はしなへといふともを聲をきゝてよめる

とりか音をまかきにしめて花まてば霞さへこそ立とまりけれ
風たちて野辺のきゝすの聲もせず春のありかやいつこなるらむ
身をなけくいのりと人にいひなして神かきこもり花はま□まし

音かな

注④★春の夜のあくらの海人の袖よりもまどほになれる浪のひゝきか
里の子かむすひ捨たる若艸の末野のきゝすありかしらるれ

竹

一むらのけふりそふかく成にけり春のあらしや吹たゆみけめ

ゆけば数こそそふれ

更てこそ数をそへけれうちよする波のつゝみはときもわかね抒

★ねさめすは有明かたのうす雲を外山のまつにかけて見ましや

十八日の夕つかた注⑤★かへりけるに、江戸におはしまして観如院ときこえし君うせ給

の御

ひぬとて、御なきからむむかへに人と出たつよしきゝて

★かりそめのおもひの家もすてかねてかへれは出る人そかなしき

難波ちかき玉造人佐々木春夫か父二月の十日はかりみまかりぬときゝて、彼岸桜を一

ふさおしたる紙にかくかきて遣しける

かの岸の花もにほへるきさらきとおもひなしてもをしき別か

難波人兼田鶴雄か七十賀に安氏の橋百顆をおくるとて

は

またきより ゆ おもふ を

百歳に三十たらしと本けくらむかすはかくこそみてまほしけれ

水郷春望 二月兼題

月

すみた川のほる夜湖のたゆたひに花の香かなら風そしゝめる

さ波よるよし野の岸の朽柳こゝろつよくもはるかぜそふく

注⑥若菜あらし木の川よその竹いかたいかにかさねし春のみとりそ

湖上雲 当座

人もしか駒はとめしを見るめなき浦とや雲の立かへすらむ

山姥や雲のはてにてつゝむらむ笛根のちみにしづく由玉

若林徳一ものまなひにとて、都へのほるに二月の末つかた
都こそ花はにほど来不みゝんのひとそ心をあたにちらすな

野遊

かへらめやかたしく袖の下艸にすみれもましる野邊のうたゝね

木蓮華

夕月もかゝる梢のはなはちす水なきそらにたれか植けむ

故郷

遠江人

長坂秋名か六十賀に家の名を万年青園といへは
しけりそふ園のおもとにむすふ実のあかぬ色をやよろつ世に見む

出し

の宗祇庵

連歌師宗祇か三百年忌に對竹憶昔といふ題をおかせ下、正(カ)置安緒か田邊より
まひにて哥會すとて善水かもとよりこひおこせければ

吳竹のもとくたちたるあとなからさすかにかなしす忍のしら雪

二月廿六日の夕つかた遠江人池谷某をいさなひて、西田三子とゝもに名艸山の花見に

まかりてよめる

おなしくは花のもとにとさそひ来て春日のかげりかたりくらしつ
山さくら夕はえたにと見にこしをいほりしつゝそ人はまちける

此歌は千手谷にわらふきの庵つくるを見てよめるなり

★夕かけの花の雫はそはめとも寺井のひさことる人もなし

廿九日美孝富義こ門の三人とゝもに三葛里より山つたひしてふたゝび名艸山の花を見

し時よめる歌とも

うちむれてこゝろはゆかし名艸山あたるかたに花もこそ見れ

あともなき臂遠(を)り口の草とれば花そ中々たゝに見えける

かた岡のくぬ木のかれ葉かきつめてこの芽煮つゝそ花は見てまし

わたつみの夕日もかをる花の香を塩くむ袖にひとりしめゝや

末地にかりしめまして花見れば浪の千里も色香なりけり

青雲のしらせし花の山さくらさくらはさけと人はすさめず

★かせさそふ尾上の雲も花ならしふもとの枕にうす雪そふる

★一枝はおりてかさゝん鶯のとかむる聲をはなにきくへく

鳥なかぬ御山のよひに咲出てはらるゝ花やわびしかあらむ

注⑦★坂こえていつおとつれし山風にさくらかもとの雪のうはふき

★花さらをすゝくかけひのみなかみや鷺の高嶺にとくるしら雪

嵐 まけ

注⑧★うつりゆく花のしゝまはとゝまらて霞にきえし鐘のおとかな

花の枝に我□あり□□□ま弓弦絶□つ□□の盛ならねば

よふことりよへは人来と鶯のいとふ山路ははなも見はてす

なれ

呼子鳥いつの春よりすみぢめて音つれそめし苔の下水

花ふゝくあらしの底にあしたつのきのふか立しわかか浦見ゆ

時つ風なくさの山に咲花の鐘なりけり春のうなはら

いとまあらばうち出て見よあまをとめ花の盛に浪風はなし

おぼしまのもとあらの桜咲しより沖ゆく船もこのまにそよる

箱崎に風はをさめよ名艸山尾上のはなのひも解にけり

ゆく水に花こそ見えすあらし山あらしなかゝるはるの夕しほ

名艸山都を遠みいたつらにさけばや花のまたき散らむ

人ならばこん世の春は咲花をあくまでみつの船きほひせん

一ときの酔そわか世のみつの船うき世は花の名瀬にへたてゝ

はるしらぬ我身をつみて菜艸山立わつらへる花の下影

名草山おもへは神のしとゆふにゆふへの鐘に花なしらしそ

★なくさ姫おりけん花の白妙をいつすみそめの袖にやつしゝ

黒流の袖にもなびく菜艸姫あたる花の種はまきけむ

り来

山さくらぬさとみられし春を経て神の縣もうつろひにけり

★なくさ山ふもとの里もおほふまで咲けむ花のかけそ恋しき

そかなしき

注⑨★おほひけん蔭ともしらで里人のたきゝになせる花もありてふ

まはらなるかけかなしき山寺の花もかさしはのかれはてなで

わたの原見わたすかきり花ならば浪の穂わけて世はのかれまし

はるゝとかすみをわたあいつ千船まほになゝめに見えかくれけり

沖かけて花の香かすむ夕波にうかへる色は桜鯛かも

注⑩★咲花の雲あにかすむ大船はうならす風をたよりともなし
風よほふ雲のみたれか^カさく花の梢のそらにたてるしら浪
さく花にかさねてしろき八重浪も沖にへたゝる夕霞かな
咲散て花より花にくらふれは沖のしら帆は数なかりけり

★かねうてばこほるゝ花を山鳩のよそけにあさるふる寺の庭

苔の上

春とりのついはむ種は墻もせに風のまきたるさくらなりけり

庭

花さかり雨にならしに山ぼとのかすみのおくによしこもるとも

(付箋) 花の木はみとりさしそふ春雨に植てや菊の秋をまたまし

注⑩★しら雲のなゝ重の並枝七かへり生かはるともはなはふりせし

ゆくへなき雲と見つゝもなからへてそのきさらきを花にくらしつ

水きよきは

ひきとる袖ちすの上の夕しめり後のよかけて花を見しかな

夕霞かさなる あまてわけのぼらまし月夜なりせば

□□な□□くれ□□花の雲間よりみそかに用のもれなましかば

山寺は夕くれおそしとふ人の坂路にかゝる花のしら雪

★しおりせん人やまつらん市女笠つほめる花のかげにかくれて

★雪もまたふる郷出し旅人の袖なぬらしそはなのゆふ露

卑の手かはなふみにけしうらなしのはかなきあとに夕風そふく

蔭ふるき花にやとらむわたつみの浪もかへらぬはるのゆふくれ

あすはまたたかへる雲に棹さして見はてぬ岸の花をわけまし

かへあまに、美孝にいまなはれて岩崎某かもとをとらひけるに、をりしもひよ本の

たなかりすむを見す

さく花の雲あに見えし宿とへばあらはつかしき袖の香そすむ

八重桜

★なこりなくさけばみたれて飛蝶の袖にかさなる八重桜かな

鶯聲和琴

まとおおもしろ

此殿のゝたけはたえしことかみにはつ音もとみて鶯のなく

春雨

青柳の梢の雨とおもひしに露のたまぬくゆくひすもなし

山里のつかひやまたむ春雨に植てや菊に秋を契らむ

花とみしやよひの雲の末くれてあやなき袖に雨そかゝれる

★桜戸や花ちる雨のかをらすはおとつれ絶しゆきの玉水

★はれやらぬ露とみしを東屋のまやの雫の音たつるまで

わきてよも花には雨の音たてじをしむ涙やみたれあらそふ

注⑫ ★海鼠の口といひなとかめそもしほ艸かきもあつめぬうらみなりとも

山濤識量

★のほりたち山もとをくうち渡すけしきにゝたるすかたとそ見る

毛玠公方

★いにしへのおもかけにこそなひきけれ人なみならでなひく玉藻の

遠盜卻生

★むやひ船とかすはやましよしやそのいかりの綱は身にまとふとも

衛瑾撫状

★玉の床をしめはをしのおすまもてあらしよりけにへたてられつゝ

千公高門

注⑬ ★やよ翁門のかきりを高くせよ馬も車も引いれぬへく

曹參趣装

★とくしりて雲あはるかにたち出る心の駒や月もなりけん

庶女振風

鄙行降霜

★土さけて日はてりなからうちとけぬこそその霜ともむすふうらみか

范再生塵

★こしきには塵のみつみていひしらぬ名こそうき世に立まよひけれ

晏嬰脱粟

★しらみゆくよはのけしきやいとふらむきねかつゝみの数そすくなき

詰汾興魏

★ことならはしなぬ葉もとりかけよ天つをとめの袖ならばそて

鼈令王蜀

★かれはてし入江のあやめねをつきて国もせにこそかをりみちけれ

不疑誣金

★しひ柴にさかする花よ後瀬山のちこそしらめ実なしことゝは

卞和泣玉

★神無月わか誠よりしくれつゝもみちにそめる袖のしら玉

檀郷沐猴

★うはへなき酔のすさひの舞をしも鼻かき猿はものとかめせり

謝尚鳩鵂

★聲そへて又たちならふ人もなきとりの舞こそ花と見えけれ

太初日月

★處せき山ふところは出なから月日のかけの猶くもりつゝ

季野陽秋

め

注⑭★それとなくうつれはかはる一とせをこゝろの色にしけてけるかな

欄外

藤裏葉 廿六才

紫の雲にまかへる菊の花にこりなきよの星かとそ見る

河海に草雲寿星ノ心也 寿星は徳星トモイフ師功王代明時嘉瑞坎

荀陳徳星

注⑮★いひしらぬ玉のむら菊空かけてかおるか星の数そかさなる

李郭仙舟

注⑯★玉まきの真かいは人のしらねともかへる舟路に光さしつゝ

王忙綉被

★吹すさふ風にたくひて人しれぬめくみをかへす錦なるらん

張氏銅鈎

注⑰福州とひはりはもたで家鳩の翅にかけしかきわらひかな

丁公遽戮

★まめならぬ心としらてゆるしつるなさは臣のあたにこそあれ
雍齒先侯

注⑱★をりとらむ花とおほへる袖にこそ人のこころもうちなひきけれ
陳雷膠漆

は

★もろともにうれはうるしのつやよりもまして似かひす心なりきや
范張雞黍

注⑲★まち酒のかへはさたかにしられねと誠のあとそ今もくまるゝ

注⑳周猿山嶷

は
ふ

★天そゝり目にたち山し高ければつなははふともよすへくもなし
會稽霞舉

★さしのほる朝日の影のうらくと霞わたれる天のはしたて

季布一諾

つ郁子

注㉑★君かもるうへの実ひとつ得ましかはもゝのこかねもをしまさらまし

注㉒阮瞻三結

★幽ことはよそにへたてゝうつし世をひとりかためし三の関守

郭文遊山

★さわらひのをりならねとも岩そゝくたるみの上に心すましつ

袁宏泊渚

注㉓★月よりもさやけき聲をしられすを高き扇の風はあふかめや

黄琬對日

★日のあまり月のはしめのたとへこそ老もかくるゝはえには有けれ

秦宓論夫

★大空に氏も有てふものさため神は朝日のゑみてきくらし

孟軻養素

こそ

★ひこはえも花はさかめもとあらの萩のふる根に水そゝかまし

注㉔楊雄草去

★底深き池のこゝろはくみも見てはけしく人のいひはなつめる

向秀聞笛

★をりしもあれ垣よりもるる笛の音にへたてぬ中のむかしをそおもふ

伯牙絶絃

★わたり川まさりて人のかへりこは緒たえの琴をつきはしにせむ

郭槐自屈

★心せむたかきすもゝのこのもにかうふりたゝす人もこそあれ

南康猶憐

注⑳★吹たちしあらしも露にうちしめるすもゝの花は庭にちらさし

魯恭馴雉

★さのつとりなれぬる里とおもひしにこもふさはしき桑のもとかな

宋均去獸

★おしよりも人のこころしあゆかねば虎は兎のあなたへそゆく

廣客蛇影

つき

れて ㄥ

注㉑★たおやめの心うこかす影ならばさこそ急ましゝもまはとらまし

殷師牛口

よは

注㉒★有しゝのこたへまうしのあらそひやわか耳さへにさやきのみして

元禮模楷

★うらめしき風たえしよりやつふさの梅のひとひら香こそみちけれ

季彦領袖

★二葉よりなほく見ゆるを何にしかこのてかしはとおもひくたしゝ

魯褒錢神

注㉓★さはれしもいはほとなさはなしつへしたゝあやしきは瀬にこそ有けれ

崔烈銅臭

注㉔★まひしつゝしひてをもへる花なればよにそたかきほつ枝ともなし

梁竦廟食

★みまからばいずへのおものそなふへくますらたけをの功たてはや

趙温雄飛

★さゝきとる心はもたではやふさのはくゝみたてし人やいく人

枚乖蒲輪

注③★老ぬれは蒲生のわか葉やはらかにつゝむ車のわれをめすとか
遠江人高す― ふしの山の中つに雲龍のほれり

―― マミ(カ)入へシ

ふしのねの雪のしら玉まきとほりかけるか龍の雲もてるまで

鯉のかた

おもひたつ門もしばしはたゆたひてなびく玉藻に心よすらむ

七賢木のかた

竹の葉の露ふく風のそよさゝにみたりかはしき世をはしのはし

長歌に次――

藤

山里は藤の盛に成にけり松よりまつ波のうきはし

そのはつ尾にとりまけて見はやおもふ

山鳥の尾ひのまつはかゝらすばなかゝらましや藤の花ふさ

のかゝみにもみつして見はやし

かけてや見まし

乞巧奠

天川浪やよすらむをとめこかねかひの原に有風そふく

盆躍のうた

をすゝきのまねくとあれど女郎花なひくかほのかけにほひて

□りく共いふものうた

も

みとりこの心ひくらむ高砂の松のちとせの春のすきびに

めのわらは文箱さし出たる

朝かほの心もとなき露よりも夕かけいそく待つむしの聲

此歌朝ほらけの霧立たるにはひんの少しふへたみたれは鴈帽子おし入たるさまもし
とけなく見ゆるか朝顔の露おちぬさきに文かゝむと花の影も心もとなき麻生の下艸

なとくちすさひて我かたへゆくにと見えたるを品定のおのかしゝまち顔ち(カ)らん
夕くれなどのこそ見所はあらめ

といへる詞などにおもひよせたる也

七月十六夜一門と木川原にこもしきて酒のむ

さやかなる月の光にたちか緒のむすほゝれたる心とけにき

八月十四夜熊野の神司たちの旅やとりにて月を見てかへるさ 田布の道にうかれ出る
にたり穂の露いとしずけく井堰の水音さやかに聞えければ

あらう穂の露の光しあまればや水のひゝきの月にすむらん

いと更わたるまゝに雲むらたちて雨ふる

おろかなる心のおくの雲なれや見はてぬ月に雨そゝくなり

十五日、頭家の正二位の君のかゝせ給へる懐紙の表補なれるを、壁にとりかけて濱木
のあろし

綿屋にて茶すゝめつゝその御世のあはれなりし事ともかたらひをりはやう南おもての
笹生にはなちたる鈴むし秋毎に聲さはやかなるをよよひの月と聞せはや佐保川のかは
つならねとかへしてはくちをしかりなむとはし近くともなふに月も出ぬ塵はかりの
くまなく年比いとめずらかなる光なりければたゝにしもえあらで人まねにひねり出た
るうた

の上にななくこほるゝ

てる月の色玉笹の露しけみまやかにゆらくむしの聲かな

むら雲もをさまれる夜の月ながら安詰野の露に影やつすらむ

雨

★更ぬめり月もしたゝる桐の葉の露にとたえし窓の秋かせ

深夜初鴈

みたやもりきゝつやいかに神なびの山こす鴈のさ夜の初聲

注⑩加納清雄とゝもに今の家の遠祖のゆかりある加納村にものすへく契おきけるを七

月の末つかた 身まかりければその日墓にまうてゝ

★くれぬまのけふしもひとりなけかめやすの契をたかへさりせば

擣衣

琴の浦の 名もかよへとや 海人衣 つまゝつ風に ひとりうつらん

よこもりに出くる月のしる妙をかさねてうつもあさましの身や

あはれよそうみ麻のはてと人やきく賤はた衣うちたゆまゝし
夢まよふ身をこそかこてから衣うちあかすらん秋の長夜に

将門か石井堂の古瓦を硯にして人の歌こひければ

これをたに硯となしてなりかふらいまもたゝしき筆はたてまし

将門記などに神籤にあたりてうせし事見たれはかくよめるなり

十月廿六日、鳴瀧のみみち見にとて一門一胤のそゝのかしければ、久道三子弘白とゝ

もに正昭をもいさなひて、道すから歌かたりつゝゆく。寺にて酒かたむるほどに和夫

おひ来たれり

みなれ棹なれし筏を吹よせてよこさまにのみすさふあらしか

まれやこの襲つ集コ弔いコしコのまコとコ杉木の風コにコたコわコめコあコ

雲まよふ小岫のあらし吹たちてしくれをまねくむらすゝきかな

もみちてる山里とへはふるおホ（カ）きコの日コなたコほコりコのコひコちコ枕コせコり

雲うすき外山のたな田年をなみくたつ夕日のかけさへにうき

此歌は古しの夏てりつゝきて山田などはたのみすくなかりければよめる

もみち葉の蔭なる川のいさり水あさくは秋にこゝろよせめや

木にはかく色そかなしきさをしかの聲の秋にそきのふくれしか

もみち葉もあはれとおもへ大かたのうつろふ世にはそめぬ心を

丙辰詠艸

立春

春

くる味に咲もあふかな玉椿いつの初日の影にそめけん

天のしたなびく霞のはるコとコかコきコりコなコきコ世コをコかコけコてコそコたコて

鶯

鶯のはつ聲ならし朝日影にほふ木間に玉ゆらく也

春かすみへたつとすれと鶯のなくなる山のちかくも有かな

鶯の来つゝなれてもくもしけはうかへる雲になりぬ也けり

述懐

おもひ入道になつみてけふも又三度むかしをかへり見しかな

梅

な

さりにくき枝と併見えそ梅花はひかくれたる窗にさくとも

梅初開

もかをりて

かけまゝ見え下 咲に

南吹野川の氷たえくにとくもかた枝の梅かをあなり

正月はかり人をわかる

き

廣瀬川梅さくかけのうちはしはとりやはなたん君とまるへく

学士迎春

辰

卯

ひそみけん龍は空ゆく春にしもこそこの毛の筆をこそとれ

梢に

南さす窗の十枝けふよりの春越えしへく梅は咲止けり

劔

神まつる御代のしつめの劔太刀つみはも八重にうちきらひつゝ

春興

川のほり小鮎やつらん桜人うたふかたにや水棹とらまし

述懐

窗こもりとるかとするは□ひゝく火筒の音も耳になれにけり

待鶯

余寒

も

鶯の来つゝしなな(カ)はさとかへる雪菜や窗のこさめならまし

殿の命の御位すゝませ給へる御よろこひに

○寄松祝といふ題にて人ととゝもに

君か為よもきか島に子日して玉松か枝をさゝけてしかな

山家月

うつほ木の苔のすたれのひまことに月もしめりてましらなく也

淵明把菊のうた

庵さすかた山風の音さすは手にとる菊はかをらさらまし

孟宗筍をほるかた雪いと深くして竹たわめり

生たゝは末おもからんくれ竹のものとねさしを雪に見るかな

わらはへ雪まろかしたる

笹舟はすさましけなる此ころの心にのりて雪あそひせり

義家朝臣のうた

旋雲に

菊の花みたるゝ鴈の聲す也あたやこもれる小野のふし原

高野山寶珠院の母の八十八の賀に 桃

なかゝれとねかふこのみのゆく末も母のまもれる花咲にけり

さゝれ石

数しらぬほしとも見ゆるさゝれ石天の川原にたかひろひけん

枝珊瑚枝

わたつみの神のをとめかたをり来て君にさゝけし玉の枝かも

家に初會しける時、人のもとより梅花をおこせけるを、菅原大神やめで給ひけん。い

ひしらすめてたきをとめの天くたれるを見て

梅かゝにさそはれてこしたをやめのゑみもうかへるよはの杯

礬若菜

ぬま(カ)よ

汐みたぬほとこそつまめはなれ礬に生るから奈はくき立にけり

梅雨客

咲ぬとて立よる人をかへしては若木の梅の名たてならまし

香はとめつ今はとおもへとから衣たつははしたの梅の夕風

春日さす岩ねの水のうはこほりとけてかたら^{タラ}へ梅も咲たり

無量光寺の本間寺をゆつりて後父の五十年忌に藤屋の墓詣すとて故郷に尾張國にとて

出たつ時歌こひければ

苔のうへに衣の袖をうちかさね肩もへたてぬ手向ならまし

野外董

□□ほと□

車心さぬ野中の松のふる根にもわりなくさけるつほすみれ哉
引わけしすみれもあはれ里の子か牛かふ野邊のもりの木陰に

かすりなき野邊の葦もわか袖にあまるさかりはつましとそおもふ
花

春されは花にしめゆふ山守のいとまなき身そうらやまれける
忌火鑽も神につかへぬ世なりせは春さく花もたきゝならまし
文机のかめにはさゝし桜花わかおこたりの塵やかゝらん

にけり たゝ春

あし引の遠山桜咲しよりたゝはのるはのとけからなん

関路帰鴈

こまかてに

かけてこしふみなき鴈の聲す也けふも関路やかへりかねたるする

嘉納尚寛か母の病いえたるよろこひに廣田社に繪馬奉るとて哥こひければ
神かけて千代もといのる人の子のこゝろの駒も引たてにけり

田家水

かい まて

かへりこし野川の牛のあとゆきはまたすみはてぬ夕川の水

杜柏

柏梁殿をつくる工かあふき見しもりのこたちはしめはへてけり

か

源氏若菜巻 御裳着の事かへ殿の西おもて子御木丁よりはしめてこゝの木やしきをは
ませさせ給はす云々 柏口殿者皇后御在所也見九条右丞相曆記云々

此もりにかへの油の種まきて高野の雪をたかてらすらん
高野の寺々の煙すへて柏の油を用ゐるなり

岡春月

岡へのの松の上葉にかけ見えし月はよるこそ霞はてけれ

おほろなる月夜かなかへる家路をよきてをらまし

岡崎の花辻家路のをちなれとをりてかへらん用おほる也

山路春月

春風のかすみ吹とく立田路は月もつゝしのひほひ也けり

もとより

秋田晴かをし小子たゝよふもあはれ阿波戸の綱手船はやひたのまん和歌の浦邊に

とよみておこせける かへし

友か嶋はるかなる戸もへたてなくむやひの綱の絶しとそおもふ

二月十日夜月いとさやかなりければ

秋よりも清き月夜に数たらぬかりのゆくへを見そめつるかな

二月の空おほらなる月かけを門の柳にかすめてそ見る

コナルニセ

十一日名艸山寺より三葛の濱邊を見わたして

まち

濱ひろきなくさのあまの湖くみて花まかてら花ちらす也

海上眺望

ゆく

五百重浪千重にかすめるわたつみの沖の船の帆影かなしも

岡早蕨

きさらきはやゝたけにけりこかくれの岡邊のわらひもゆとせしまに

おほろ月に白花にたてり

それとみる袖もおほろの月影に袖か香ならぬ香をやとむらん

岡田諸岳か五十賀に

千歳山わかさきたちてしるへせん杖にもかなととれる筆也

し

知足院こそ越國よりかへりましにことし江戸へゆく前に

こしの雪あつまの花もつれなしやふたとせ君をわかるとおもへは

二月廿一日安田長穂か身まかりけるをりかたはらにありて

真白髪長穂のを遅は山ならば熊野の御山海ならば南の海の五百重浪千重なみしきに瑞山と

いくし

しみさひたちて常葉なす有経てましをことゝへと答もせねは霊床に霊をきせむと申たて

ゆふとりしてゝ家ゆすりをきのまにゝ真白髪の影に見えつゝわれもよはゝく白ゆふは真

白髪なせり萬代にいつけ家人とれはかれはに

山家橋

み山木の横たはれたるまゝなからわかかたそはの橋となりనికి

書

とひかへり心空なるかり鳥のまことのあとはいかゝこめまし

二月廿八日小桜廂につとひて糸桜をめてゝ

花の香にむすほゝれたる聲す也こや鶯のたきの白糸
柳

根こめにもさそはれぬへき柳かな今さらつよき春のあらしや

浦春月 玉津島會

月かすむわかの浦路の夕ありきあまか袖さへ花の香そする

中村良清か七年 靈祭に春懷舊

三栗の中山路を杖突も不突もゆれて我兄子と哥おもひせし春花の時にはあれと霞かもたち

てし

ぬえ子

やへたつゝも花かも散や埋めし我兄子かあとゝめかねて我心島うらふれにけり。七年の昔なりせは引鳥のひけゆかましを花見てましを

野若艸

華山のかけ野の艸のうすみとりさのみや駒にまかせはつへき

保田能登守の家に

若浦末神社で哥よみける時花

をりかへす浪のみたれにたくふまで礪山さくら風たちにけり

遠村花

花

★國見すとのほれは寒き山風にけふりをもるゝ家はたか門

山家恋

かた

おもひいる道ならなくに越しになく山にも恋の道こそありけれ

寄関恋

うはへよく祠の関はすゑなから人のこゝろの横はしりして

行路雨

不破山は關もある

雨すくるならの大路のたか門にむかしをこひて袖しほらまし

有馬某日別荘にて紅白の牡丹を

老しらぬ月日のかけとおのつから花のまかきにみちたらひつゝ

おちこち見わたして

かと

あら駒を霞にならひ野邊かけてまかきの花の小けにこそ見れ

春夜玉津島にて

わかの浦の松のけふりにそこはかとむすほゝれたる月の影かな

房生神主のもとにやとりける夜雨ふり

朝露の色なつかしき花そ見むこさめは夢にさはらさりけり

朝とく起出て

又

十や見む玉津島根にやとりせし夢の内外の花の朝雲

玉津しまこきのひとのさふしもとてうたする

岡董

此岡かそれかわか菜の跡とはんはつせをとめかすみれつむ也

ふる

茂岡のおのゝかけし木むければあさみとりにもさくすみれ哉哉

水上落花

さやかなる底の影たに見るへきを雨の後瀬に花そ散とく

雲外落花

岩こえて雲うちはらふ袖をしもとめてちりくる山さくらかな

あともなくちりゆく花に山かせのはらへはのほる雲のまきれに

枕

寄梅恋

今さらにまたしとおもへとこまくらの塵はつかしき梅かゝそする

蚊遣火

空たきにおもひよそへて賤のめか人まつよひのかやりなるらん

瀧邊蟬

つせ 小札

青山もこかるゝ真日に瀧の音は絶てもとよむ蟬の声哉

葵

たくひよき艸にも有かな二見かた浪にねさせる巖ならねと

巖頭苔

音

なかれては岩ねの苔に埋^{うも}るらんかたゝよりなる水の帯かな

ね

心からいほほの小道方入て苔の雫に袖やくたまむ

たゝふかき苔のいは屋のとことはに松の葉すきて人やすむらん

池萍

かきやは池のかゝみもすまゝしをものうき艸のしけりのみして

池水によるへもしらぬうき艸やましまぬなはゝ人もこそかれ

里卯花

里の子かさしてをしへし卯花のうきねは月のすみかなりけり

山家卯花

山里の桜かもとのうつき垣うしや雪のみ夏も消せて

濱五月雨

吹上の松ふく風はさみたれにしめれと寒きよはの袖哉

田上蛩

とれとなほこすかる蛩の玉筥(葛)はかけは千町にわかれてそとふ

市郭公

ほとゝきす何にかふとは市人のあたへもしらぬ聲^{こゑ}はたへらん

池菖蒲

す

は

見ゆる也けり

たかねにもなひくあやめ止池水の心あさゝをしられぬるかな

梯本大神之像贊

言靈の佐吉幡布国に人さはにまてはありて人皆の哥おもふ毎に大御像いつきまつれる梯本の大神御魂玉ちはひちはひたまはれ鳥角の高き神語とこなめのよし埜の川のいやとこしへに

氷室

おもふこととゝこほりつゝすくるかな氷室はあくる時も有けり

雨後蟬

夕立の雲のかへしやししくるらんかた止松の蟬のむら聲

名所蚩 玉津島會

なら人のかへる袖にもつゝめとや玉津島根に蚩とふらむ

夕顔

★垣こしの葉山の雪の一なびきふる雨しろし夕顔の花

★あし垣は夕かほしろしかはほりの翅よりこそけふもくれしか

夏鳥

わか竹はおやよりたかくなりぬめり子もちからすの又きさる見ん

納涼

海雲 東

ほすあみのめにもさはらぬ秋風をまたきにやとすあまか袖かな

を

春憶故人といふことを題にて八木美穂かをととし身まかれむをしぬふ歌

神風の伊勢を過真熊野の熊野をこえて海原のゆたけき見つゝ古の言おもひすと我兄子か訪
来しものををとゝしと道ぬる年の六月の空ゆく雲にかへりけん魂かなしもはろくくに分来
し道の藤白の御坂にたては春去は霞きらへと名艸山山邊に在れば春去は花はさけとも我心

文とり

なくさめかねて荒玉の年月かへにおこせたる書を見れば見る毎に涙くましも萬代の像見に
せむと遺しけむ書等を見れば見る毎にましてかなしも夢のねのななき春日につらくくに見
つゝおもへは久堅の虚津御魂は書毎にありかよはめと目にし見えなく

祈雨の日安田能登守のもとにて

神かけて雨まつ田ゐの水車ふみとゝろかす音きこゆ也

こと人をおもふ

よるとせし糸のみたれやことかたに引たかへゆくはしめなりけむ

よひのま

此

殿声

かへしてはふしまち月も何せむにまた宵ながら團はさゝまし

老人

年ふれは霜をむすへるもとゆひのもとかし我身消はてねたゝ

とまらす

め

小笹原そゞや初雪とはかりにあともとましぬたそかれの空
残暑

穂に出ぬわさ田もあらしむろの江の入江のすゞみいつ迄かせん

源夜月

寝てあかす門やたゞかんふくるよの雨雲わけて月は出にけり

納涼

★川水をへたてゞむかふ高とのゞ燈はかりすゞしきはなし

若月

川水に髪すます子かなかしけん楡形したる夕月夜哉

あらし山に雪つもれるかた

松もみな花こそさけれ嵐山しつけき御世に雪のふれゞは

あまた たるかたへに

染貝を 糸にぬきて松の折枝あり

一ノ目（カ）は松もためたるすみの江に色と貝のまじる春哉

閑庭虫

露わけてきかんとそせしむしの音はおのつからにもすめる庵哉

虫

むしの音のきこゆるからにすむものは人のこゝろと月と也けり

盛花

心

あはれ此花の盛し久しくは郷も神代のまゝの命ならまし

晚秋山

や

もみち葉にあらし吹しく遠山をあすさへ秋の色と見ましを

黄菊のかた

大王の御代にきはしき長月ときくもこかねの花咲にけり

連峰霧

注◎★五百重山霧ふかゞらし菅笠の雫におつる有明の月

長田鶴夫霊祭に秋雨といふ題にて

天雲の雷寺に露霜の奥津城こもり年久に成ぬる君願かけに吾恋る君かへりにし時来むかひ

て長月の鐘禮の句に初鴈の来なくをきけは道ゆきに歎そ吾する古に今も有せはしくれの雨
しくく

や敷もに雁か音の聞ゆることにうるはしき文見てましをめつらしき文見てましを
時雨ふり雁はなけともあはれ文なし

しくれの雨まなくふりくも古の秋ならはよろしまなくふりくも

寄月末

水の上に見ゆるも空の月なれと手にしとりては袖やぬれなん

川水鳥

も

川上は雲こそさわけあちむらのいさとしくれやさそひ来にけん

幸遇泰平世

なからへて千とせとの(カ)みもおもふ哉をさまれる世の心おこりに

盆踊

て

棚機のをかれし後の七夜経ていく里人かめくりよるらん

萩風

原 そよさら

風

かけるふのすたく萩生をふく小世にたちわかれたる秋のすかたか

田上露

(欄外) 夕露のしけき山田を妹かためしのひにかると袖ぬらしつゝ

妹か為しのひにかると夕露のしけき山田に袖ぬらしつゝ

秋夕清

くれにけりはたやこよひのともし火に見えまし秋の心ほそさを

閑庭露

なびきふす蓬か庭の秋の露袖にさへやはかけておもひし

秋恋

やつれゆく

よる小なまき身をうみ柿のいたつらに落もはてなて秋やすきなん

秋待恋

吾門の松のしけみをもる月のかけはかりたに見えはこそあらめ

秋雨

風もまち雨もまたしをわかやとの萩の下葉のぬれてさへちる

月前時雨

のこ

一むらの雲の御中に有と見し月をもゆして降しくれ哉

網代ゆ

もりあかす身をこそかこてあしろ木のならへるかけを月にかそへて

もみち葉にみたれあらそふいとひをのゆくへやいつら宇治の川風

あしろもる夜床のあらし吹絶て今そみけしはおほひますらん

江寒菫

も

あしの穂の雲ふきなかれ月早みふる江のま浪はなになりつゝ

顕恋

ゆかりの色と

本かま

せななたつおもひも空になかめてき(カ)有明かたの空の一むら

繪工廣隆かこへる古鈴の歌

手すさひの鈴のゆらきにとふ人も世になり出ん時機こそまで

里神楽

里みたるふゝきの中にうちそゝく御湯は吾世のあられ也けり

寒山月

注③★落かゝるみか月同し浪の穂のはての高山み雪はれけん

あくみあて見はいかならん雪の上のつるきの山に月更にけり

筆

束をたにさかみにかみてもものからんわかとる筆の鹿毛は禿たり

布

妹かおるあしろの布は薄けれといさよふ浪にいかゝぬらさむ

氷魚によす

風たてはいさゝにましるいと氷魚のせんかたなみによられんとして

古寺鐘

こえ

おとなしの川そひ寺をわかとへは名作のみきし鐘ひく也

吉野川は
おとなし

永山寺の前をなかるゝほと音なし川といふ

暮山雪

山ゆくはたかつまならん笠松の夕づくかけに雪はらふなり
くらはしに月もかゝりぬふる雪の夕山こえはたとらさらまし

競馬のかた

あやめ引けふのためしの馬なればよゝをかけてもくらふへき哉

鹿島重正四十賀すとて弟たちの歌こふに

春祝

花笠にまたかへすへき老ならしかぬ色香はさけにうけなん
さく花にまとふ心し老せすはよそちも老のはしめならめや

露

うつ蟬のからをとゝめしかきねよりいやはかなにもおつる露哉

雨中落花

山姫のかりの花にそゝくらし粉川のよとせ雨かをる也

廣沢の月のかた

廣沢の池のこゝろをふかしとは影見る毎に月もしるらん

かきつはら(カ)にかけるふすわれり

葉かくれし色こそ見ゆれかけろふのやすらふまにや花は咲けん

依花待春

わかやとの一本さくらたか為にいそく春ともしらすや有らん

島雪

かゝやくとけふりなててそ豊年のトはまさしきゆきの島人

家の

歳暮會納に風のこゝちにてくるしかりしかは

香をたにもさそはぬ風を身にしめてはなを(カ)くや春はまつへき

卜恋

それとなくとふもかた木の灰占に一夜こかれておきゐつるかな

梅の花をりておこせける人のもとへ備中國矢掛郷にて製したる柚醬をおくるとて
ものゝふのえひらやいつゝ梅かゝにやかけの里は春めきにけり

蜜

道

七わゝの玉をつらぬくいとすちもたゝ一かたの道みちにこそよれ

椿

妹とわか植木の椿たくひよく咲もよそふる玉あへるらし

月

前つ戸の殿戸のきかひ何せんにあくるまでこそ月はさしけれ

春興

梅かゝはこほるゝ水にかすたれて柳のまゆのふりすも有かな

十二月の半はかり

佐々木春夫かもとへつくゝしをおくるとてよみてそへける

かきはらふまかきの霜に一筆のかきまくれたるつくゝしかな

丹後守為忠朝臣の百首に九月十三夜さきまくりいま二夜をはみてずしてくまなきもの
はなな月の影濱松中納言物語さかし心のきは高くさいまくれたるやうなる清少納言か
さいまるといへるもともにいままた其界にゆきたらすしてはやりかにうちすゝみもの
する事をいへり

廿一番 同

左持 菅賢 柿園門古屋菅賢

人こゝろいつしかあかしのうちとけんみは鈴舟のなるかひもなし

右 在恒

逢事は枯野の布ねのなましひにくちのこりたる身をいかにせむ

左鈴舟の寄くる波に驚きてつまの上野のきゝすなくなりと見えて明石に詠る例は見えねと
此すゝ舟と言は駄鈴なりといへれはいつくの浦にも詠へき也一首をかしく聞えし右枯のふ
ねまたをかし二の句かくても宜けれと枯のゝ舟木といはゝ調へよかるへき坎そはは作者心
のまにゝなり

鈴舟枯野名たゝる相模の交双たる如くたやすく強弱いひかたし

わたの原まかちぬきおろしゆく船のよそめゆたけき恋もするかな

注記

① 西の濱殿におはしましける大殿のかくれさせ給ひぬれは門さしてこもりつゝこしかたの事とおもひいてられてかなしひける中に今は十年のをちつかた西山某こととりて國の名所などをさとひたる事ともとりましへて記すへく仰ことありける序に那智の滝にかたはいかさまにかうつすらんはたうみつからゑにかけるもあるをしかくゝなど御もと人に仰せられける事ともいひつたへられければおもほし給ふらんまゝにといそしみけるをしはし病にふせるほといかなるよしにかありけんそのふみつくることとたえてかの人もこそまかりしかはさしもおもほしけむ御心もいたつらになりはへらんとゝかへすゝ世のあちきなき事をなけきて

- ② 太刀か緒ををしかの角にとりしてゝ旅寝やせまし萩原の里(拾遺十六丁)
- ③ ゆくと見しきのふの鴈も立かへりおつる田つらにあわ雪そふる(拾遺五丁)
- ④ 春の夜のあくらのあまの袖よりもまとほになれる浪のおとかな(拾遺五丁)
- ⑤ 物へまかりて二日三日ありてかへりけるに江戸におはしまして観如院ときこえし君うせ給ひぬとてなきからの御むかへに人と出たつよしきゝて
- ⑥ 朝菜あらふ木の川よとの竹いかたいたかいたゝめる春のみとりそ
- ⑦ 坂こえていつおとつれし山風そさくらかもとのゆきのうはふき(拾遺六丁)
- ⑧ うつりゆく花のしゝまはとゝまらて嵐にまけし鐘の音哉(拾遺六丁)
- ⑨ おほひけんかけともしらで里人のたきゝになしゝはなそかなしき(拾遺六丁)
- ⑩ さく花の木のまをわたる大船はかならず風をたよりともし(拾遺六丁)
- ⑪ しら雲の七重のなみ木七かへりおひかはるともはなはふりせし(拾遺六丁)
- ⑫ 海鼠の口といひなとかめそもし本草かきもかへさぬうらみなりとも(拾遺三十五丁)
- ⑬ やよおきな門のかきりを高くせよ馬もくるまも引いれぬべし(拾遺三十六丁)
- ⑭ それとなくうつれはかはる一とせをこゝろのいろにしめてけるかな(拾遺三十七丁)
- ⑮ いひしらぬ玉のむら菊空かけてかおるかほしの数のかさなる(拾遺三十七丁)
- ⑯ 玉まきの真かいは人のとらねともかへる舟路にひかりさしつゝ(拾遺三十七丁)
- ⑰ とみ草とひはりもたで家鳩の翅にかけしかきわらひかな(拾遺三十七丁)

- ⑱ をりとらむ花をおほへる袖にこそ人のこころもうちなひきけれ (拾遺三十七丁)
- ⑲ まち酒のあへはさたかにしられねと誠のあとそ今もくまるゝ (拾遺三十七丁)
- ⑳ 周公山疑 (拾遺三十七丁)
- ㉑ 君かもつ郁子の実ひとつ得ましかは百のこかねもをしまさらまし (拾遺三十八丁)
- ㉒ 阮瞻三語 (拾遺三十八丁)
- ㉓ 月よりもさやけき聲をしられすは高き扇の風はふかめや (拾遺三十八丁)
- ㉔ 楊雄草玄 (拾遺三十八丁)
- ㉕ ふきたちし嵐も露とうちしめる李のはなにはにちらさし (拾遺三十九丁)
- ㉖ たおやめの心うこかす影ならばさこそ多ましく月はとらまし (拾遺三十九丁)
- ㉗ ありし世は答へまうしの争やわか耳さへにさやきのみして (拾遺三十九丁)
- ㉘ さゝれしもいはほとなして片ふちのかたりやすきを上つせにせん
- ㉙ まひしつゝしひてをりつる花なればよにそ高きほつえともなし
- ㉚ 老ぬれは蒲生の若葉やはらかにまとふ車のわれをめすとか
- ㉛ 加納清雄とゝもに遠祖のゆかりある加納村にものすへくちきりおきけるをほともあらて身まかりければそのとふへかりし日のころほひ墓にまうてゝ (拾遺二十丁)
- ㉜ 五百重やまさりふかゝらし菅笠のしつুকもおつる有明の月 (拾遺十四丁)
- ㉝ おちかゝる三日月きよし浪の穂のはての高山みゆきはれけむ)

参考資料

- 柿園詠草拾遺 加納諸平著 吉川半七発売 明治十八年刊 二二四、五―二七四
- 加納諸平の研究 山本嘉将著 初音書房 昭和三六年刊 二二四―三八〇三
- 校註国家大系 十九卷 近代諸歌集 講談社 昭和五年刊 九二一、一―一六五
- 江戸期紀行文学全集 一卷 津本信博著 新典社 平成十九年刊 九一五、五―一二二N
- 続日本歌学全書 第七編 近世名家歌集 上巻 佐々木信綱著 博文館 明治三十一年刊
- 二二四―三九
- 國学者夏目麿と歌人加納諸平 平石基次編刊 昭和五十二年 二二四―一七〇一